

タカ ツルを狩る

——中世アラブのタカ狩の詩より——

堀 内 勝*

Goshawk, Hunting Cranes

——A Hunting Poem from the Medieval Arab World——

Masaru HORIUCHI*

はじめに

ここに訳出し、考察を加えるのは、アッバース朝華やかかなりし頃、詩人として活躍したアブー・ヌワース Abuu Nuwaasu, 'al-Hasan bnu Haani⁽¹⁾ (イスラム暦130/西暦747~195/810年頃)の *tard* (狩猟) に分類される詩一篇である。「タカ 鶴を狩る」と内容から推して題を付したが、詩集の方には *hiraabun fii quffaaz* [手袋に(収まる)爪] との標題になっている。この標題は第八詩行の前半から採られたものであり、「手袋」も比喩表現であり、また内容全体を表現していないので、あえて内容を概観する別のタイトルを付すことにした。

二十詩行の本詩は、狩猟詩としては長い作品に属し、原文は二種を参照した。『詩集』の方をベースにし、『鷹書』中の「タカ狩の詩」の中に採録されているものを参考にした。『詩集』とは Ahmad 'Abdul-Mujiidi l-Gazzaalii が校訂、註訳したものであり、1372 A. H./1953 A. D. にベイルートの Daarul-Kitaabi l-'Arabiyy (出版社) より出版されたものであり、本題は *Diiwaan Abii Nuwaas* と言う。この詩人の全作品が8つの主題別分野のもとにまとめられている、現在入手できる唯一の *Diiwaan* (詩集) である。²⁾ 『鷹書』と本稿で略号して参照してゆく書は、Abuu 'Abdullaah 'al-Hasan bni l-Husayn 著の *al-Bayzarah* (鷹狩り) (1371 A. H./1952 A. D. Damascus) である。後者の著者のことは、著書ともに、いずれの資料にも見い出されない。³⁾ 校訂者の M. Kurdu 'Alii は⁴⁾、本書の内容から推して著者を概略以下のように紹介している。エジプト人で、ファティマ朝第五代カリフ・アジーズ・ビッラー (在位975~996 A. D.) に仕えた *baaziyaar* (タカ匠) である。11才の時よりタカ狩術を学び、最終的にタカ匠頭となり、二万ディーナールのイクターを授与される。タカ狩用の猛禽類、チーター、サルキー犬を五万ディーナールで管理育

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

成を委される。カリフの「野の御幸」に多く同行し、特に378 A. H. (988~89 A. D.) の狩獵行は史書にも記されている。カイロ近郊の狩場は旧カイロのフスタート地区より見ると、東北のムカッタム丘陵地帯、東南のヘルワーン地域 Deir l-Qusayr 及び西を南北に流れるナイル河沿い地域であった。そしてタカ狩術20年を経た年にこの書 al-Bayzarah を書きしたためた、ということである。この書物については、稿を改めて述べることにするが、165~166頁にかけて、本稿で述べる詩作品が『詩集』とは多少の違いを伴って記載されているので、これを指摘し参考にしながら訳論考を進めてゆく。

全二十詩行は、内容的には前半11詩行までがタカに視点を据えたものであり、後半12詩行からは鶴を狩る叙述となっている。一詩行一詩行、タカ狩りに関してのアラブの伝統概念、習慣等が伺えて興味深い。本稿は三節に分けて観てゆく。第一節ではアラビア語の原文をローマナイズで記し、その下に律格を示す（-は長拍、~は短拍）。⁵⁾ そして和訳を行ない、律格に破格があればそれを記す。第二節では内容の考察を、第三節では形式（律格等の）の検討を行なうこととする。

第一節 原文 歩脚 和訳

1. 1 qad 'asbaqa l-jaariyata l-juunaa

- - ~ - / - ~ ~ - / - -

min qabli ta'awiibi l-munaadiinaa

- - ~ - / - - ~ - / - -

乗り行く鹿毛達 仲間と既に 競いつつあり
未だ礼拝呼集者の 声響きわたる刻の前なるに

〔破格 munaadiinaa < munaadiyyiina 〕

1. 2 bi-kulli ma'ruufin bi-'a'raaqi-hii

~ ~ ~ - / - - ~ - / - ~ -

'alaa 'uyuuni l-'armaniyyiinaa

~ ~ ~ - / - - ~ - / - -

同行のタカのその血統 いずれも^{なだた}高名るものばかり
たとえアルメニア人の ^{まなこ}鑑識眼をもってしても。

〔破格 'a'raaqi-hii < 'a'raaqi-hi 〕

1. 3 rabiibu baytin wa-'aniisun wa-lam

~ ~ ~ - / - ~ ~ - / - ~ -

yurba bi-riisi l-'ummi mahduunaa

— ~ — / — ~ — / — —

わが家のまま息子 人慣れも また良ろし
母親の^{はねもと}翼羽の許 卵抱かれ ^{そだ}成育つに非らず

1. 4 lam yunki-hii jurhu hiyaasin wa-lam

— ~ — / — ~ — / — ~ —

yabgi la-huu bi-θ-θufli taskiinaa

— ~ — / — ~ — / — —

獲物との^{あらそい}闘争に 傷つけらるることも無く
また残滓で^{ためし}獵欲を なだめられたる 例無し

[破格 yunki-hii < yunki-hi
la-huu < la-hu]

1. 5 kurrazu 'aamin saaga-huu saa'igun

— ~ — / — ~ — / — ~ —

lam yaddaxir 'an-hu l-tahaasiinaa

— ~ — / — ~ — / — —

換羽して一年経ち その姿形余りに美事にて
どれ程賛辞を送ろうと 賞め足りぬこと無し。

[破格 saaga-huu < saaga-hu]

1. 6 'albasa-hu l-takriiza min hawki-hii

— ~ — / — ~ — / — ~ —

wasyan 'ala l-ju'ju'i mawduunaa

— ~ — / — ~ — / — —

自ら織りし 新たな^{あらしば}風羽で 身を装おい
胸には横縞の 重ねし^{いき}駁羽の 粹なチョッキ

[破格 hawki-hii < hawki-hi]

1. 7 la-huu hiraabun fawqa quffaazi-hii

— ~ — / — ~ — / — ~ —

yajma'na ta'niifan wa-tasniinaa

— — — — / — — — — / — —

彼、皮手袋持ち 先に槍の穂先あり
鋭く磨かれ 研ぎすまされ 並び集まれり

[破格 la-huu < la-hu
quffaazi-hii < quffaazi-hi]

1. 8 kullu sinaanin 'iija min şadri-hii

— — — — / — — — — / — — — —

taxaalu 'itfay ra'si-hii nuunaa

— — — — / — — — — / — —

これら槍の穂先は いずれもその中央より

きれいな彎曲を見せる

その頂きの 両の端と 結ぶ形象 そは

劔の刃を想像わせる

[破格 şadri-hii < şadri-hi
ra'si-hii < ra'si-hi]

1. 9 wa-minsarin 'aklafa fii-hii şafan

— — — — / — — — — / — — — —

ka-'anna-huu 'iqdu ʕamaaniinaa

— — — — / — — — — / — —

また嘴 赤茶色にして 上が下より長し

それは恰かも 八十粒の 首飾りに似る

[破格 fii-hii < fii-hi
'anna-huu < 'anna-hu]

1. 10 fii haamatin ka-'annamaa qunni'at

— — — — / — — — — / — — — —

ba'da hibaali s-saabiriyyiinaa

— — — — / — — — — / — —

頭頂の白きは 恰かも頭布 被りし如

サーブールの 仕立屋の 織りし白布の

l. 11 wa-muqlatin 'ašraba 'aamaaqa-haa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～ ～

tibrān yaruūqu s-šayrafīyyīnaa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～

目と言え 白目の部分 なめ尽くすは
両替商をも その色で 驚ろかす程の黄金

l. 12 nursilu min-hu 'inda 'itlaaqi-hii

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～ ～

'ala l-karaakiyyi duraxmiinaa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～

いざ、^{りょう}実獵にて タカ手より 放たれば
襲い^{わざわい}かかる鶴の 何たる災難なるか！

[破格 'itlaaqi-hii < 'itlaaqi-hi]

l. 13 daahiyatun taxbitu 'a'jaaza-haa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～ ～

xabtan yuhassii-ha l-'amarriinaa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～

^{おもはず}不慮の災いかな 鶴 尻に一撃を喰らい
^{にが}苦き^{もろもろ}内臓を その体内より 呑み込まれんとす。

l. 14 yahmii 'alay-ha l-jawwa min fawqi-haa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～ ～

hiinan wa-yugrii-ha l-'ahaayiinaa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～

タカ 鶴の空中舞うを禁ず 時にその上を飛びて
はたまた時には どん欲にそれを狙うかとも。

l. 15 wa-hunna yarqa'na šuraaxan ka-maa

～ ～ ～ / ～ ～ ～ / ～ ～ ～

jahwara fi-s-si'bi l-mulabbuunaa

— — — — / — — — — / — —

鶴達 助け求めて 鋭き叫び上げる
坂道運ぶ駄獣が 難儀して上げる絶叫の如くの。

- l. 16 fa-muq'aṣun 'uəbita fii saḥri-hii

— — — — / — — — — / — — — —

wa-xaadibun min damihi t-tiinaa

— — — — / — — — — / — —

次の瞬間 タカの爪 肺に達して 即死さす
大地を染めるは 鶴よりほとばしる鮮血。

[破格

saḥri-hii < saḥri-hi

t-tiinaa < t-tiina]

- l. 17 qad maṣṣaqat-hu fi l-ḥaṣaa maṣṣqatun

— — — — / — — — — / — — — —

'alqat mina l-jawfi l-maṣaarriinaa

— — — — / — — — — / — —

嘴による一撃は ^{はらわた}内臓を切り裂きて
その裂き口の空洞より ^{つよ}腸などを撮み出す

[破格

l-maṣaarriinaa < l-maṣaarriina]

- l. 18 ruḥnaa bi-hii naḥmilu 'akbaada-haa

— — — — / — — — — / — — — —

fii zawratin 'aṣran wa-'iṣriinaa

— — — — / — — — — / — —

タカと共に出かければ 鶴の肝必ず持帰る
僅か一度の出獵だとして 十も二十もその肝を！

[破格

ruḥnaa bi-hii < ruḥnaa bi-hi

'iṣriinaa < 'iṣriina]

- l. 19 'a'ta l-buzaata l-laahu min qismi-hii

--- / --- / ---

maa lam yuxawwil-hu l-šawaahiinaa

--- / --- / ---

アッラーはオオダカ達に その取り分を
与え給う

そはハヤブサ達には 決して許し給わないもの。

〔破格

qismi-hii < qismi-hi

šawaahiinaa < šawaahiina 〕

1. 20 li-kulli sab'in tu'matun miēla-huu

--- / --- / ---

fi-l-qadri 'in fawqan wa-'in duunaa

--- / --- / ---

猛禽のそれぞれには オオタカ同様の

餌たるものあり

それ以上のものもあれば それに及ばない

ものもあり その能力に応ずべきもの

〔破格

miēla-huu < miēla-hu

duunaa < duunan 〕

第二節 内容 註釈

第一詩行：tardiyyah（狩獵詩）の matla'（出立し、冒頭句）の定型に従って、「出獵」の時刻が表示される。多くは早朝、それも夜明け前であり、本節では、その時の表示がアザーン（礼拝呼集）の，ṣalaatu l-fajr（早朝の礼拝）の前，という表現でなされる。「出獵」の足となるのは，juun と jaariyah。juun とは jawn の複数であり，それらは〈暗色〉を基底義として，動物の体毛色を指示し，「黒色」，「暗赤色」が具体義である。従って〈馬〉ならば「鹿毛，黒鹿毛，アオ」が当たる。jaariyah とは「若い女，女中，女奴隸」が一般義だが，ここでは〈馬の同僚，仲間〉といったところ。なお『詩集』の註釈では juwn を「馬」だけでなく「ラクダ」の可能性があるとし，jaariyah は「馬，ラクダ」の他に「nujuum（星々）」とする可能性もあるとする。⁶⁾「星々」とした場合騎乗の動物と何を〈競う〉とするのは定かではない。また『鷹書』の方では jaariyah ではなく qaariyyah（れき青状・タール状のもの）としており，クルド・アリーの註釈では「黒い鳥」を意味している，と記している。⁷⁾ qaariyyah 説をとれば「タカの黒さ」を言っているように解せられ，従って馬の色とタカの色がその黒さを競っている，ということになる。夜明け方



〔図－１〕 鴨を捕えたオオタカを quffaaz（皮手袋）の左手に据え上げる若きタカ匠。16世紀イラン。パリ・ルーブル博物館蔵。

の、白みゆく時刻を考え合わせれば、この説も成り立とう。とは言っても、早朝のアザーンは、どうみても未だ暗いうちであるし、本文ではそのアザーンが唱えられるさらに前の時間帯のことでとされている。

「アザーンの声」を直接表現せずに taθwiibi l-munaadiinaa [(礼拝) 呼集者の声の反響すること] という換論表現をとっている。munaadii とは「呼びかける者」であって、アザーンを唱える人、mu'aḏḏin とここでは同義として用いている。munaadiinaa は破格が重なったもので、原型は munaadiyyiina で、まず重子音平滑化の処理が行なわれ munaadiina とし、次いで以下の押韻に合致するため ṣilah 処理され、-na が naa となった。ṣilah とは rawii (押韻子韻、本詩の場合/n/) が開音節、即ち母音を伴っている場合（これを muqayyadah という）、母音 a の場合、'alif を付加して長母音化が許される、この事例に当たる。⁸⁾

第二詩行：早朝の旅出において乗り行く馬に続いて、視点を手に据えるタカに移す。タカの血筋の良さは、次行でも明らかなように^{トヤ} 躰飼いで何代も混り無く続くもの。ここで用いられている「血統」の原語 'a'raaq は 'irq の少数複数形。多数複数形は 'uruuq または 'iraaq。'irq とは〈木の根〉が概念を形造る「根本、根源」の意味を核として、「血筋・血統」の意味を外延させる。tadaaraka-hu 'a'raaqu xayrin (善の血統は彼に及んでいる) という言い回しもある。そして鷹術

に巧めた北方に住む「アルメニア人」al-'armaniyyinaa。現在のアルメニアはトランスコーカサス地方になってしまっているが、かつてはもっと南方の現在のトルコとイランの国境山岳地帯にあった。アルメニアはヴァン湖やアララート山を包含しており、そこはオオタカの中でも白羽の著しい Baariqiyyah（雷光）種の主産地でもあり、またハヤブサの中では最大の Sunqur（シロハヤブサ）の産地でもあった。これらを手にしてやって来るアルメニア人のタカ匠やタカ術をアラブは一目を置いていた。アルメニア産のタカ類に顕著な白羽は、寒地の降雪地帯であるため、雪がその白さを一層極立させ、より優美にするものと信じられていた。アルメニア人の鷹匠の往来及びアルメニア産の名鷹アル・ヤフシュールのことについて、父と共に自ら鷹匠であったイブン・ムンキズが『回想録』の中で語っている件りがある。⁹⁾ 十二世紀前半、十字軍との戦争状態にあったシリア北方シャイザルの城主であったイブン・ムンキズは、この書物の後ろ三分の一を、タカ狩を中心とした己の狩猟行の思い出を綴っている。

この詩行、『鷹書』の方では ma'ruufin の所を mansuubin としている。¹⁰⁾ mansuub とは「nasb（系統、系譜、家系）の辿り得る」、「血統が明らかな」の意味であり、血統をより強調している表現であって、こちらの選句の方が良いとも言えよう。

第三詩行：タカは一腹で平均四個の卵を産む。その中で巣立ちを迎えるのは、良くて二羽である。子育てに熱心かどうかには個体差があり、往々にして血筋の良いタカは子育てはうまくないし、子もひ弱い。こうした子は卵の時期から育ての上手な、全く別な成タカの「まま子」になる。「まま息子」の原語 rabiib とは〈産み親でないものに〉「養われ、育てられる子」であり、人間の場合のみでなく、他の雌親の乳で育てられる〈馬、ラクダ、羊、山羊〉などにも適用される。ここでは詩人本人の所有のタカの中からの交配種ではなく、血統正しい他家のタカを、卵の時から、またはヒナになった時から自家の雌に母親代りとして育てさせたもの。同一種交配から来る劣化、弱化を避ける配慮はアラブには古くからあった。

「人慣れも また良ろし」。野生のタカを「人慣れ」させるのは、鷹術においては、まず必要な第一歩である。これを manning と呼んでいるが、人慣れのみでなく、人間と共に生活し、猟をするのであるから、人的環境、人々の往来、雑踏、人声、現代ならば車の騒音、クラクション、犬の接近、及びその鳴き声、等に驚かない訓練を行う。アラブでは本文のように 'aniis または ta'niis と言う。

「卵抱かれ」の原語は mahduunan、直訳は「抱卵されたことについては」。動詞 hadana は「抱卵する」の義であるが、元は hidn という名詞が先行する。hidn とは「胸、わき腹、わきの下」といった分化した意味と、それらを合わせた「胸元」の意味がある。分り易く言えば「赤児などを抱いた時の、抱いた側が当たる部分」のことである。hidn から派生しているため hadana の第一義は〈人間などが〉「抱く、抱擁する」であり、〈鳥などが〉「抱卵する」は次義である。

第四詩行：血筋が良い、ということは見た目だけでなく、実際の猟においても実証されねばな

らない。なだめ、すかしに対しては気品で拒む。「獲物との闘争」の原語 *hiyaas* とは、「策略をもって相手に対処する」、「相手にうち克たんと、うち負かそうと一生懸命になる」の義であり、タカの場合、相手の〈獲物〉との「闘争」ということになる。獵場の経験を踏む程、そのタカの獲物に対しての接し方が巧妙に、巧猾になり、負傷することも無くなる。獲物を捕えたなら、当然獲物の肉の一部が分け前のはず。「残滓」*əufl* であってはならない。*əufl* とは厳密には穀類、食べ物、液体などの容器の中に残ったもの、澱、を意味する。*əufl* を用いた諺に *laysa θ-əuflu ka-l-mahdi* (澱は生とは別物) がある。混ぜ物・残り滓と本物とを一緒くたにするな、の意味で用いられる。他のタカにやる餌とか自分の餌でも残り物で、その日の餌がさを済ませるような評価の低いタカではない、ことを言っている。第十九詩行も参照。

第五詩行：視点をタカの背中、即ち翼に移し、全体を見る。「換羽して」の原語 *kurraz* とは「タカ狩に用いるタカ、ハヤブサ」の意味である。その具体的内容は動詞 *karaza* が明らかにしている。*karaza* とは一般義「隠れる、避難する」であるが〈タカ〉が動作主になると「羽毛が抜け換る」、「換毛する」の意味を実現する。そしてその受動形 *kuriza* は〈タカが羽毛の抜け換わる間〉「小屋・カゴの中に入れられる」意味となる。我が国でも獵期が終る4月頃、タカをきれいに換毛させるために暗い部屋に閉じこめる。これをトヤと言い、拵の字を当てる。

第六詩行：翼にさらに言及した後、視点を前に移し、オオタカに特徴的な胸の様を叙す。「自ら織りし 新たな嵐羽で」の原文 *l-takriiza min hawki-hi* の直義は「彼の織りで(仕上った)換毛を」。*takriiz* は上述の *kurraz* と同語根。「嵐羽」とは特に「タカの羽」のみを指す和語。胸の色相いをチョッキに見立てる、何と巧みな喩え! 「胸」は *sadr* が一般語であるが、ここでは *ju'ju'* (*pl.ja'aaji'*) が用いられている。*ju'ju'* は特に「鳥の胸」「ハト胸」を意味場の中心に持ち、それから広く「人間の胸」、「馬の胸」さらに〈舟の胸〉すなわち「船尾」の意味にも拡大される。鴨の胸を材料にした料理は、アラブ世界でも最高の美味の一つとされている。*maa 'atyaba juuḏaaba l-'aruzzi bi-ja'aaji'i l-'iwazzi!* (鴨胸のジューザーブ・ライスの何とおいしいことよ!) という慣用句がある。ジューザーブとは「人を魅するもの」の意味で「新鮮な肉と砂糖とで調理した料理」のこと。胸は翼と色の見事な対比を見せ、「駁羽の粋なチョッキ」。その原語 *wašy* とは「飾りのついた、または刺繍された衣」。タカの胸毛は、若タカの時タテ縞であったものが、トヤを重ねるとヨコ縞を増やしてゆく。成タカは黒い横縞を密に重ね、白黒まだらの奇麗な胸になる。ここでは、二・三年目のタカなので胸の上部だけが白黒の縞になっており、チョッキを着用したように見えると思われるので、こう訳した。「駁羽」とは「色のまだらな鳥の羽」を意味する和語。

第七詩行：正面に向いた詩人の目は、タカの胸から足もとに移行。はっとさせる比喩。「皮手袋」*quffaaz* は、本来ならばタカ匠がタカを手を握るための「皮手袋」¹¹⁾ であるが、後続の内容、

及び所有代名詞「私の」ではなく、タカを指す「彼の」から、そこから「足ゆび」すなわちかぎ爪の延びている根本の足先、すなわち跗蹠^{あせき}の先端を言っていることが分かる。跗蹠から趾の部分はウロコ状に裸出しているので我が国の鷹術用語では「ウロコ」と呼ばれていた。そしてそのウロコの先端は「槍の穂先」hiraab。単数は harbah。これを動詞化した harraba とは「槍の穂先を^{とが}尖らす、鋭くする」の義。長い槍は rimaah というのに対して、より短く小型で穂先が広い槍、これが harbah である。もっと小型のものは、この指小辞 huraybah という。タカの、あの鋭い鉤爪を「槍、槍の穂先」になぞらえ、両足で前六本、後二本の槍が揃えられている、と描写しているのである！鉤爪すなわち槍の穂先は「鋭く磨かれ」ている。原語 ta'niifan は「鼻と化する」→「物の先端を鋭くする」→「矢尻、槍の穂先を尖鋭化する」。先端の鋭さだけではない、「研ぎすまされ」てもいるのだ。その原語 tasniinaa とは「歯と化する」→「歯のように出歯ったものを鋭くする」→「研ぎすます、洗練する」。タカの鉤爪はアラブのそれよりも、我が国ではさらに分化された認識体系を形作っている。後趾（第一趾）の爪は獲物を懸ける「懸け爪」、前趾の第二趾（内趾）の爪は獲物を打ちつける「打ち爪」、第三趾（中趾）は獲物の体^かに掘んでゆく「鳥掘み」、第四趾（外趾）は獲物の体に爪を返してゆく帰籠「かいるこ」又は「かえるこ」と。さらにこれら鉤爪に班がある場合の呼称もある。¹²⁾

第八詩行：前・後半詩行とも鉤爪のことを述べているのか、前半詩行のみであって、後半詩行は直義通り「頭」の描写に移行したのか、定かではない。どちらにも解釈できるよう、訳に工夫をこらした。次詩行では嘴も含めた頭部に描写は移っているので、後者の説がより妥当しているようか。原詩には大きな異同がある。前半詩行 sadri-hi のケ所が『鷹書』では matni-hi に、また後半詩行の 'itfay ra'si-hi のケ所が mahnay 'itfi-hi となっている。¹³⁾ これに従えば、訳は「その中央より」が「その背中より」になり、「その頂きの～そは」は「その傍らの結ぶ二つの造作いずれもが」となる。

「槍の穂先」sinaan。この原語は内容の推移からタカの鉤爪と解釈するのが最も妥当している、但し〈物の先端〉、即ちタカの部位の先端、嘴、頭部、翼など、その解釈も成り立つ。これと平行して「中央」の原語は sadr である。「胸」が第一義であるこの語を文字通り解すると、形姿全体を描いていることになり、「胸から各部位の先端まできれいな曲線を描いている」との解釈できる。タカの姿は、確かにいずれの部位も、尾羽などの浅い程度はあれ、曲線となっている。「劔の刃」も二通りの解釈が成り立つ。「鉤爪」のその曲がり、反り返ったアラブの、あの蜜刀の刃に似る。一方の「頭」説。「劔の刃」の原語は nuun。nuun の最も一般義はアラビア語アルファベット第25番目の文字名称である。その形象（〔図-2〕を参照）を全体的に眺めると、下段の左端の書体が明らかなように、ヌクタ（点の部分）が嘴を含めた頭部となると想像される。一方 nuun を「劔の刃」ととると頭頂部の線のイメージか、あるいは、大タカに顕著な眉線（目の上、嘴の上部から後頭部にかけて延びる白線。眉のように見えるところから眉線、短いものは眉班と呼ばれる。欧名では Superciliary stripe または簡単に Eyebrow）の描写とも解釈できる。

第九詩行：タカのもう一つの鋭きもの、武器である「嘴」minsar にまた鋭く迫る。猛禽類の嘴は minsar というのに対して普通の鳥類の「嘴」は minqaar と言う。これは英語の beak の bill に対するのと同様である。その形容の一つが「上が下より長し」safan <sa^hfaa. safaa とは「二つの平行する長いものの先端が等しくない」ものを言う。

その違いも、微妙なずれでなく、

明らかなもの、例えば指で言うと人差指と中指との差ではなく、人差指と親指との長さのような場合を言う。タカ類の上下の嘴は、この例えの如く、親指を人差指で覆ってなお爪の部分の外にはみ出る、そのような形になる。人間の唇で「上下がうまく合わさらず、上の方が垂れ下がるような」唇をした人を 'asfa と言い、上述の safaa と概念を等しくする。

嘴の喩え、「八十粒の首飾り」“iqdu θamaaniinaa. この奇抜な喩えを両原書の註釈者はいずれも何を指して喩えとしているのか黙して語ってくれない。八十という数は、我が国の八百や八十とと同じく〈多数、沢山〉を表わす数である。民話でも「八十の窓」、「八十のランプ」、「八十のローソク」、「殺された数八十人」など「四十」と並び、それよりもっと数の多い、という意味合いをこめて用いられる。ここでは数の多い首飾り（真珠では多くて60粒が首飾りを構成する数）であるから、同時に長くもなって、その置かれる形が丸形から20粒程あぶれた余りの形がタカの嘴の形になることを言ったものと思われる。赤茶色という色の配慮を勘案すると、真珠よりもルビーか。

第十詩行：視点を頭頂に移し、オオタカではやや珍しい白色が入り、それも相当の広さを占めていることが叙されている。「頭頂」の語 haamah は、「頭」ra's の全体の中、「前頭部」即ち「額」は jabhah, 「後頭部」即ち「うなじ、首筋」は qafaa', 「側頭部」は jidaar (直義は「囲い、壁」) に対して「つむじ」daa'irah を中心とした、あるいは二つの頭骨の合わさる「縫合部」mufrag を中心とした部位を指す。「頭頂の娘達」banaatu l-haamah とは「脳髄、脳味噌」muxx, dimaag のことを、「頭頂の母」'umm l-haamah とは「脳髄膜、脳味噌を外側から包む薄膜」のこと。頭頂部の羽毛の滑らかさ、白さが織り物に喩えられる。後半詩行、『鷹書』の方では前半二語が sabba hayyaaki となっており「織り手の白布」がより明瞭な語が選ばれている。

サーブールは地名であり、原語の s-saabiriyyiinaa の直義は「サービリーの人々の」であり、



〔図-2〕 アラビア語アルファベット
nuun の上は一般形、下は
ディーワーニー書体三種

サービリーとはサーブールの変形形容詞の形である。saabuur とはペルシャの一地方名であるが、この地の出身の故かサーサーン朝の時代、及びイスラム期以降もこの名で知られる著名人が出た。サーブール一世 (A. D. 241~272) はサーサーン朝の王で、ビザンツ帝国と争い、現在トルコの東方にあるニシービーンを併合し、東ローマ皇帝ヤーヌースを捕虜としたことで知られる。サーブール二世 (A. D. 310~379) もビザンツと戦闘に明け暮れ、「肩抜き王」と綽名された。捕虜となった男の肩甲骨をすべて外させたことで知られる。サーブール三世 (在位383~87)、彼の時代にはアラブ諸部族とも戦い、後者の勢力が強くなっていったことが推断される。Saabuur ibn 'Ardašīr は、イスラム期以降十世紀にプワイ朝の大臣として活躍し、A. D. 990年のバグダードに図書館を建設し、1万冊の図書を寄贈したことで知られる。サーブールの地及びサーブール人は上質で繊細で優雅な衣裳を作ることで知られており、本文ではこの後者の意味合で用いられている。

第十一詩行：タカの体の部分の描写の最後はその特色である黄目でしめくられる。輝く黄目は確かに黄金色に見える時がある。「目」の原語 muqlah とは「白目と黒目を合わせた全体」即ち「目玉、眼球」及び šahmatu l-'ayn (目の脂肪分) を言う。そしてオオタカの魅力「白目」。その原語 'amaaq は 'amaq または 'amq の複数形。厳密には「眼球の涙腺に近い部分」、「白目の鼻の方に寄った部分」ということになるが、ここでは hadaqah (瞳孔) の外円、即ち quzahiyah (虹彩) の部分を指す。この部分が黒いか黄色いかでワシ・タカ類は二分される。オオタカも含めた多くのタカ類は〈黄色目〉、多くの隼類、ワシ類は〈黒色目〉である。アラビア語には双数表現があり、目も白目も双数で表わされねばならないところだが、律の関係もあろうか、前者は単数、後者は複数で表現されている。

「黄金」の原語は ḡahab ではなく、ここでは tibr なる語が用いられている。tibr とは「潰されたもの、壊されたもの」の原義から「砂金」の意味で一般に用いられる。或いは「金の原料」というような意味合いで、加工されたものが ḡahab であり、「金貨」に铸造されたものが 'ayn と言うという説あり。黄金から両賛商を引き出す連想の妙。

第十二詩行：内容は一転して、この詩行から実猟のシーンになる。狙う獲物は鶴である。「鶴」karaakiyy. 単数は kurkiyy. 湾岸には春、秋の一時期渡って来る。我が国も特に江戸時代鶴料理があり、宮廷や幕府、各藩とも正月の公式の食事には欠かせないものであった。¹⁵⁾ アラブでは、鶴の肉は「乾にして暑」、香ばしく、精をつけるものとして好んで食された。各部位にはそれぞれ薬効があり、医食としても利用されていた。¹⁶⁾ 鳥の中でも最も大型の鶴を狩るのは、限られた、特にそれ用に訓練されたタカであることも同時に示していることになる。

行末の duraxmiinaa 「何たる災難なるか」。この原語は稀語であるらしく、普通の辞書類のみか、大型の辞典類にも見い出せない。唯一 Lisaanu l-'Arab にこの語のみ「daahiyah と同義」との記述があるだけであり、語根も派生語も述べられていない。註釈類も全く同一の説明である。

daahiyah の語は本詩の次詩行の冒頭にある。

第十三詩行：タカは鶴を一撃で仕止めようとした。実際そのように訓練される。大型の鳥である鶴は頭部を狙わない限り即死は不可能。尻を襲われた鶴はタカに呑み込まれるはずの内蔵を飛び出しながら落下してゆく。「一撃を喰らい」の原文 *taxbitu xabtan* は直訳すると「(タカ) 一撃を喰らわせ」となり主語は〈タカ〉であるが、内容の流れから〈鶴〉に焦点を合わせ、受動の訳を行った。*xabata xabtan* とは、ラクダとか馬、ロバなど四足獣が〈前脚〉で大地を「踏みつけたり」、敵対する動物・人間を「蹴ったり」する意味である。これに対して「後脚で踏みつけたり、蹴る」ことは *ramaha* の語が当てられている。タカの一撃は、鉤爪を前に伸ばして行うことから *xabata* の語の方が選ばれたのであろう。詩人の狩の実際の知識と描写の巧みさが想像される。恐らく懸け爪と打ち爪とで尻を切り裂かれたのであろう「苦き内蔵」がその体内から噴き出てゆく。その原語 *al-'amarriinaa* とは、「最も苦き二つのもの」の義で、具体的には「貧困と老衰」, 「*ṣabir* (アロエ) と *ṭuffaa'* (カラシ)」, 「ニガヨモギとコロシント」。このような簡便な双数表現はアラブ文化の中で二つの対局にあるもの、或いは類同のものを選び出し「最も～な二つのもの」という典型を作り出している。ここでは鳥類の尻が引き裂かれる場合であるから小腸から大腸といった美味な部分ではない、食べて苦いだけの部位を言ったものか。この語は *'amarr* (最も苦き) → *'amarraini* (最も苦き二つの, 対格) → *'amarriina* (疑似複数化双数対格) → *'amarriinaa* (脚韻統一のための *'alif* 付加) の手順で変化している。

第十四詩行：一撃で倒せなかったタカはUターンして、獲物を下に見て空中高く再び舞い上がる。この飛行動作はタカ類が、獲物を襲ってもろとも地面に落ちることもあるが、危険が大きいので鋭い鉤爪で「一撃を与えて」、再び舞い上って獲物の状態を見、位置を見定めて、再び急降下して獲物を仕止めるための動作である。その様が上下の位置関係、タカの様子、鶴の傷つき具合からタカが鶴の飛行を禁ずる風にも見える、という訳である。その飛行習性を見事にとらえての描写である。獲物の上に舞い上がり、好位置につけることを英語では *mount* と、アラブ世界では *tahliiq* と言っている。後者は「頭を削る」意味から由来している。

第十五詩行：大地に落とされた鶴はなお生き延びようと「助け求めて 鋭き叫び」をあげる。原語は一語 *ṣuraaxan* のみであり、普通には「叫び」の義で広く用いられるが、その内容はこの詩行の如く〈危険にあって自らの力ではどうしようもなく、他のものに助けを求める〉叫びである。従って同じ「叫び」であっても〈喜び〉とか〈怒り〉とかのそれではない。従って *ṣaarix* とは「叫ぶ者」の意であるが、同時に「助けを求める者」でもある。*ṣuraax* と同義語に *ṣarxah* があり、*kaanat ka-ṣarxati-l-hublaa* という諺がある。「それは任産婦の叫びのようであった」がその意味だが、出産は予期せぬ時に来てその産婦の叫びが突然上がる。不意に、予想外に、突然に生ずるでき事に対して言う。

鶴の叫びが駄獣の叫びの如くとの、これまた奇抜な喩え。「駄獣」と訳出した mulabbuunaa は mulabb の男性複数脚韻変化形。mulabb とは「labab (駄用の駱駝や馬、ロバの腹のところに付す腹帯) を装着されたもの」の義である。「腹帯のゆるみ・たるみ」(raxiyyu l-labab) とは「たっぷりした、裕りのある」換喩となっている。『鷹書』の原詩にはこの詩行欠。

第十六詩行：狙い定めて急降下するタカの二度目の襲撃は、鶴も深傷を負っていることもあり、誤たず急所に爪を突き刺す。その衝撃の強さはほとぼしり出る血しぶきによって、またその降りかかる大地の染まりによって表わされる。「肺」の原語 sahr には「心臓」またはその周辺も含めた「心臓部」の意味もあるが、普通には「肺」であり、ri'ah と同義とされ、『詩集』の al-Gazaalii の註釈でもそのように註されている。「彼の肺はつり上った／ふくれた [intafaxa(t) sahru-hu]」とは「彼は度を越えたことをした／無理をし過ぎた」の意味で慣用されているが、普通には、臆病者、弱虫が恐ろしくてたまらないのに無理をしてやせ我慢している(していた)ことを言う。やせ我慢をすると、アラブはこのように「肺が気管支の方につり上がる／ふくれる」と考えている。sahr の語根 sahara には「肺を傷つける」の基本義があり、また sahiir という受動形的形容詞派生形には、これを受けた「肺に傷を受けた者、肺の弱い者、胸腹部に痛みを持つ者」の意味を実現する語がある。なお『鷹書』には sahr ではなく、nahr (屠殺部位、のどの頸動脈の走っている部分) と記されている。この部分も急所で即死させる部位には違いない。

急所に爪を突きさし「即死さす」。その原語 muq'as は「即死させられたもの」の義で前半詩行は、主語が〈鶴〉の受身構文であるが、内容の流れから〈タカ〉を動作主にして能動態に直して訳した。「即死 qa's」の使役動詞 'aq'asa 「即死させる」には〈狩猟〉をメルクマールとした対義語が二つある。'asmaa 「視界内で死なせる」、'anmaa 「視界外で死なせる」がこれらである。飛道具を用いての狩、それには弓矢、槍、鉄砲の直接狩猟と、犬類・タカ類・チーターほかの動物を役しての間接狩猟とがある。猟の行為者と獲物との間には距離が介在し、また大型動物の獲物程簡単には死なない。さらに鳥類が獲物の場合、死体の確認はできたとしても相当遠距離のものとなる。イスラムの食規定では狩の獲物が〈視界〉内での死亡ならばその獲物は可食となり〈視界〉外ならば、狩によるものとの証拠が確認されない限り不可食となる。従って「即死」は当然可食となる。¹⁷⁾

第十七詩行：槍(鉤爪)で突き刺した後は刃(嘴)で切り裂くことになる。蛮刀の一太刀は外皮のみか内蔵をも裂き、大きな空洞を作る。前半詩行の直訳は「一裂きは既に彼をその内蔵において裂いた」である。「一裂きは裂いた (maṣaqat maṣqatun)」の同族語畳語用法。maṣaqa の動作は当然〈嘴〉によってなされるが、語本来は「〈衣服〉を裂く」のであって対象は衣類である。このイメージがタカの獲物をその鋭い嘴で引裂く叙に転用された。「衣服が裂かれる」再帰動詞は tamaṣṣaqa, 「切り裂かれた衣服、ぼろの衣服」という実名詞は miṣqah とか maṣiiq と言っている。

本詩行には腸と内臓が同時に登場する。「腸」maṣaarriina <maṣaarr と、前半詩行の「内臓」haṣaa とは同義語らしく、いずれの書の註釈にも mi'aa (pl. 'am'aa) に同じとある。前者はより上部の「胃」辺りが中心と言えようか、「己の maṣaarr を満たすまで飲んだ」(ṣariba ḥattaa mala'a maṣaara-hu) という表現がなされる。一方 haṣaa の方は繁用され、<腸> → <内臓> → <腹部> まで意味が拡大されて用いられている。この語を使つての「痩せた男」という表現には二様あり、rajulun xamiisu l-haṣaa とは「内臓(二腹)の空の、飢えた男」であり、我が国の「ガリガリ」とか「ヒョロヒョロ」に相当しようし、一方 rajulun laṭiifu l-haṣaa とは「見苦しくない、優しい腹をした男」とは「デブではない、肥満さの見えない男」に相当する良いイメージで見られる。お腹の線が見事な、スマートな女性は daamiratu l-haṣaa と表現される。『鷹書』ではこの詩行は第13と第14詩行の間に置かれているが、内容的にもここが応しい。

第十八詩行：タカが己の四・五倍も体の大きい鶴を身の危険も省ず襲うのはその肝目当て。「鶴の肝」('akbaada-haa) とは、何の註釈もないが、以下の詩行の内容から推察されるようにタカの好物であったようだ。胸肉他は人間の食べ物として珍重し、内臓の中でも肝を選別してオオタカ用の特別食としていた、と思われる。「肝臓」は<夢判断>においては知識、金銭、子供の表象とされている。一回の出猟で「十も二十もその肝を」とあるが、いくらかは獲物をとった直後に与えていよう。持ち帰ることを考えると一連のタカではこの数は多過ぎる。誇張と受取れば良いが、一回の出猟で、一連のタカが獲れる量は六・七羽が平均であり、ましては大型である鶴などは、その仕止める数はずっと少ないはずである。『鷹書』にはこの詩行欠。



〔図-3〕 現代アラブ・アブダビのタカ匠。mixlaa (餌合子袋) をたすき掛けにし、皮手袋より簡便なマッフ状の manqalah した左手をタカに向け据え上げようとしている。筆者撮影。

第十九詩行：初めて saahiin (複 sawaahiin), 即ちハヤブサの名前を出し、オオタカとのタカ狩用のライバルと対比させる。神の名を出すことにより、その違いが絶対であることを示している。「その取り分を」の内容は、オオタカとハヤブサとの狩る獲物が異なることから発している。短翼長尾で性猛々しいオオタカは己の何倍も大きい鶴やコーノトリをも襲って獲物とする。それに対して長翼短尾のハヤブサ類は主に鴨や鳴などをスピードを出して蹴落して捕える。こうした獲物の肉や内臓が、分け前としてタカ狩用のタカ・ハヤブサに与えられるところから、己ずとその「取り分」は異なることになる。『鷹書』では min qismi-hii (彼の取り分として) の箇所が、min fadli-hii (彼の美点として) と異同を見せている。

第二十詩行：上に述べたハヤブサ以外にも猛禽類はおり、そのそれぞれに餌たるものは定まっている。しかしその頂点こそオオタカが占めるもの。「猛禽」の原語 sab' は「saba'a するもの」の義で、saba'a とは「獲物を捕えて、その肉を食べる」ことである。従って「肉食」の「猛獣・猛禽類」であって、後者の場合 mixlab (鉤爪) を持っていることが条件となっている。原語 sab' は数詞「七 sab'ah」と有契で、数字「七」は〈完全性〉、〈循環の頂点〉を表象するところから、食物連鎖の頂点に立つ「猛獣、猛禽類」があてはめられることになった。この関連から「猛禽類・猛獣類の(多く)いる場所」の意味で masba'ah と言っている。この最終行も『鷹書』には欠けている。

第三節 形式 律格を中心に

この詩の形式を韻律の面、中でも bahr (律格) について集中して述べる。この詩は基本的律が以下ようになる。

sadr (前半詩行) - - - - / - - - - / - - - -

'ajuz (後半詩行) - - - - / - - - - / - - - -

この律格で成立する詩はアラブ詩十六律格型の中、al-sarii' (速調) と呼ばれる。サリーウ調の基本律は、その設定者であるハリールが第四円、第九の型としたことから、

ṣatr (半詩行) - - - - / - - - - / - - - - の二つを一詩行とするとされる。この拍表記を文字表記に移し換えると

mustaf'ilun mustaf'ilun maf'uulaatu

となる。([表-1] の⑤-1)と⑥を参照) この雛形は taf'iilu (歩脚) 三つから半詩行が成り立つ musaddasu (六歩脚, trimeter) であるが、もちろん、これより短い四歩脚 dimeter もあれば、これより長い八歩脚 tetrameter もある。そして本詩もそうなのだが、半詩行の最末歩脚が catalectic (完全歩脚) ではなく catalectic (欠節) である方が多い。この詩作法において、アラブ詩人の慣例は、最末歩脚への注視を生み、用語化された。sadr (胸→前半詩行) の最末単語は 'aruud (胸を開く、見せるもの) と、'ajuz (尻→後半詩行) のそれは darb (尻を打つ、腰を落ち

〔表－１〕 歩脚型及び歩脚単位

	tafṣiyl (歩脚型)	c(子音), v(母音)構成	音節, ストレス	تَفْصِيل (تَفْصِيل)	
①	faṣuwlun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \end{matrix}$	√ ∠ —	فَعُولُن	①
②	faṣilun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \end{matrix}$	— √ ∠	1) فاعِلُن 2) —	②
③	mafaṣiylun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \end{matrix}$	√ ∠ — —	مَفَاعِلُن	③
④	faṣilaṭun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \end{matrix}$	— √ ∠ — (∠ √ — —)	1) فاعِلَاتُن 2) فاعِلَاتُن	④
⑤	mustaṣilun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \end{matrix}$	— — √ ∠ (— ∠ √ —)	1) مُسْتَفْعِلُن 2) مُسْتَفْعِلُن	⑤
⑥	maṣuwlāṭu	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \end{matrix}$	— — ∠ √	مَفْعُولَاتُ	⑥
⑦	mutaṣilun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \end{matrix}$	√ √ — √ ∠	مُتَفَاعِلُن	⑦
⑧	mufaṣṣalatun	$\begin{matrix} c & v & c & c & v & c & c & v & c \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \end{matrix}$	√ ∠ √ √ —	مُفَاعِلَاتُن	⑧

n.1 ①②は xamāsiyyah, ③～⑨は sabāsiyyah.

〔筆者作成〕

n.2 下線——は watid を表わす。

n.3 下線~~~~は fāsilah を表わす。

着けさせること)との用語である。従って本詩のアルードは〔表－１〕の⑥ maf'uulaat — — — であるべきところ、faa'ilun — — —との欠節となっており、ダルブの方は fa'lun — — —との欠節で、それぞれ構成されていることになる。この歩脚型⑥についての欠節は後述しよう。

最末歩脚を除いた第一、第二歩脚においても〔表－１〕の⑤—1) mustaṣilun — — — —の律になっていない詩行も多い。— — — —は22例（第1詩行第2歩脚，以下3：2，3：4，4：2，4：4，5：1，6：1，6：5，8：1，9：2，9：5，10：4，11：2，12：1，12：5，13：1，13：2，15：2，15：4，16：2，16：5，17：1，18：2）もあり，また— — — —は17例（第2詩行第一歩脚，以下2：4，3：1，7：1，8：4，9：1，9：4，10：2，11：1，12：2，12：4，15：1，16：1，16：4，17：1，17：2，20：1）の如くである。これだけ歩脚をはみ出す律が多いと，律格型の同定も難しくなると考えられるが，歩脚型は変化できるのが許される所と絶対許されない所があって，それが個々の歩脚型を定め，一詩行全体の律格型を定めているのである。一詩行を—^{たと}テントに例え，その構成要素である歩脚六つ（六歩脚の場合）のそれぞれはテントを支える一つの watid（^{ぐい}テント杭）と複数の sabab（テント綱）と

から成る、と例えられる ([表-1] の n.2 を参照)。テント綱は長くも短くも変更は自由だが、テント杭の方は固定しておらねばならない。ゆるかったり、抜けたりしてしまうと、テント自体の張りも危ないものになってしまう。従ってテントを支える杭六本は確固としたもので無ければならない。テント杭ワティドは三文字 (即ち三子音) より構成され、それらが母音で統合されている場合、即ち $C^V C^V C / \sim \sim /$ の場合 watid maqruun (統合されたテント杭) と呼ばれ、中間の文字 (子音) に母音が伴わず、三者を前二者と後一者に分断してしまう場合、即ち $C^V C C^V / \sim \sim /$ の場合これを watid mafuuq (分断されたテント杭) と呼ばれる。「杭」の効果は「統合された」方がずっと大きく、ストレスの位置もより重く置かれる。

「テント杭」が三文字 (子音) 構成、二音節であるのに対し、「テント綱」sabab は二文字 (子音) 構成、一または二音節で、「杭」に連なってゆくことになる。「綱」にも二種類あり、中間に母音が入るだけの形、 $C^V C / \sim \sim /$ これは「軽い綱」sabab xafiif と呼ばれ、両者に母音を伴う形、 $C^V C^V / \sim \sim /$ 、これは「重い綱」sabab eaqiil と呼ばれている。このサバブ (綱) の伸び縮みの調節によってワティド (杭) が支えられ、バイト (=テント=詩行) が成立する、と考えられている。

本稿のサリーウ (速) 調に限って、ワティドとサバブの規則を見てゆく。[表-1] の⑤-1)、及び⑥であるが、その律格の基本律は、 $\sim \sim \sim \sim / \sim \sim \sim \sim / \sim \sim \sim \sim$ である。即ち、歩脚 $\sim \sim \sim$ 二つと $\sim \sim \sim \sim$ とから成立している。そして歩脚型 (tafiil) 八種の中の、サリーウを構成している上の二種を見ると、まず⑤-1) $\sim \sim \sim \sim$ の歩脚型であるが、文字表記は mustaf'ilun が充当される。mus· taf· 'i· lun で $\sim \sim \sim \sim$ との拍になる。そしてテント杭・ワティドは $\sim \sim$ の部分、即ち 'ilun の部分に置かれている (それぞれの下線部)。これは即ち、 $\sim \sim$ の部分は変更が許されないわけである。ワティドに連なるテント綱サバブは第一・二拍目の長拍、即ち「軽いテント綱」watid xafiif 二種であり、これらは変更可能である。変更可能となる歩脚型の拍表記及び文字表記は従って三種考えられる。即ち

- ④ [基本型] $\sim \sim \sim \sim$ mus· taf· 'i· lun
- ⊕ [変型1] $\sim \sim \sim \sim$ mu· taf· 'i· lun
- ⊖ [変型2] $\sim \sim \sim \sim$ mus· ta· 'i· lun
- ⊗ [変型3] $\sim \sim \sim \sim$ mu· ta· 'i· lun

である。上のように表にしてみると、杭となる部分は瞭然としていよう。他の歩脚型もこのように杭を押えておけば律格型も判然としてくるわけである。本詩は従って基本歩脚型④に対して、先に見た如く⊕の変型1のタイプが17例、⊖の変型2のタイプが22例、⊗の変型3のタイプは例がない、ということになる。

さてもう一つの歩脚型 [表-1] の⑥ $\sim \sim \sim \sim$ maf· 'uu· laa· tu であるが (半) 詩行末に用いられているだけに大なる変更が見られる。この歩脚型は長短拍で終る極めて坐りの悪いものであって、我が国の七五調の如く、後ろに次行が控えており、すぐにそれに乗り継ぐような律である。それもあって、この歩脚型を構成要素とする律格型は、アラブの十六種の律格の中、単独歩

脚では例がなく、複合歩脚としてのみ用いられ、このサリーウ調他二種の三律格のみなのである。従って律の主体となるものでもなく、このサリーウ調のように三步脚目にのみ顕われる、そうした比重の軽い、ある意味では補足的歩脚と言えるものである。この――～拍 maf·'uu· laa· tu の歩脚型は、――拍 laa· tu のところにワティド（テント杭）が置かれている。即ち watid mafruuq（分断された杭）となっている。従って、その部分の変更は許されず、許されるのは第一・第二拍である。以下三種が考えられる。

- ㊤基本歩脚型 ――～ maf·'uu· laa· tu
- ㊦変型 1 ～――～ ma·'uu· laa· tu
- ㊧変型 2 ～――～ maf·'u· laa· tu
- ㊨変型 3 ～――～ ma·'u· laa· tu

㊦の歩脚は第二文字（子音）を haðf（消去）して成立し、xabn（着物の丈を短くする）技法と呼ばれる。㊧の歩脚は、第四文字（母音なし子音か、長母音を表示する音）を消去して得られ、これを tayy（衣類を折り^{たた}畳む）技法と呼ばれる。㊨の歩脚は㊦の xabn、㊧の tayy を同時に操作して得られ、これを xabl（手足を不具にする）技法とされる。最後者㊨の xabl は zihāafu muzdawaj（二重の歩脚変更）四種に属し、禁止されてはいないが避ける方が良い技法とされている。¹⁸⁾

この歩脚型はサリーウの律格では第三、第六歩脚に顕われ、本詩でもそのはずである。しかし二十詩行に上る前半詩行の相当歩脚は――（但し第一詩行のみ――）、後半詩行のそれは例外無く――である。上述の㊤から㊨のいずれのタイプも出てきていない。それどころか四拍あるべき拍数が前半詩行では三拍到、後半は二拍になっている。さらに驚くべきことに歩脚単位となるワティド（テント杭）に変更が加えられているのである。ワティドは――～の末尾――にあるが、――（前半詩行）、――（後半詩行）いずれもこれが見当らない。

ワティドの不在。これには三つの原因がそれを許していることが考えられる。まずこの歩脚型の特殊性。先にも述べた通り、八種ある歩脚型の単独の連続、及び二種の組み合わせ（三種のものは無い）によって律格が成立しているのであるが、この――～ maf·'uu· laa· tu の歩脚型は、単独で律を構成してはいないし、サリーウ調をはじめ他二種の律格も、主律――～ mus·taf·'i· lun との組み合わせ、即ち補助として用いられている弱律であって、その意味でも変更を加えられる可能性が高いと言える。

さらに大きな理由は行末歩脚であるため。本詩は全詩行とも trimeter（三步格）、musaddas（六歩脚）であるため、それに準拠して述べると、半詩行末に来る三步脚目及び六歩脚目は押韻の関係からその歩脚型も完全な形で終らせなくても良いことになっている。本詩の場合――～がその歩脚型であるが、そのまま律通りに詩行を完了させている場合、その詩行は「律動が完全である」の意味で taamm と、または「健全である」の意味で sahiih と言う。また本詩のように前半詩行が一音節、後半詩行が二音節少ない場合は「欠節あるもの」の意味で qabiih と言っている。この欠節律がごく普通に認められているため、欠節部にワティド（テント杭）が来ても、こ

く普通に抜き去られてしまうことになる。

第三の理由は、第二のそれと関わるが、欠節部にワティドが来る場合。結節部は詩行の最末から順次行なわれる。即ち、欠節がある場合、まず最末音節が、次いでその前の音節が、という風に。従って歩脚型の内部構造で、テント杭たるワティドが末部に設定されているタイプ程この「杭

〔表-2〕 8種の詩脚型の基本型(右側)と派生型(左側)

(تقسيم التفاعيل إلى أصول وفروع)

الفروع	الأصول
② ١ - فاعلان	① ١ - فاعولان
⑤ ٢ - مفعولتان	③ ٢ - مفاعيلان
④ ٣ - فاعلاتن	③ ٣ - مفاعلاتن
⑦ ٤ - متفاعلان	④ ٤ - فاع لاتن
⑥ ٥ - مفعولات	
⑤ ٦ - مستفعلن	

〔出典 注19参照〕

抜き」の被害を受けることになる。――～はまさにこの典型たる歩脚型なのである。これを証拠立てる歩脚型の分類がある。〔表-1〕の歩脚型八種は〔表-2〕の如く二分される。ワティドを中心とした分類は④、⑤に二種ある。④は――～faa·'i· laa· tunの中で1)～'i· laaの部分、及び2)～faa·'iの部分、⑤は――～mus· taf·'i· lunの中で1)～i· lunの部分、及び2)～taf·'iの部分である。従ってワティドに基づく歩脚型は④、⑤が二種ずつとなり、②の二種を別にすれば計十種ということになる。この十種の歩脚型を二分する分類法がこの〔表-2〕なのである。'asl (基本歩脚型 pl. 'usuul) 四種 (①、③、⑧、④-2) と far' (分枝・派生歩脚型 pl. furuu') 六種(表の左欄)がそれである。¹⁹⁾ 基本歩脚型に選ばれているのは①fa'uulun, ③mafaa'iilun, ④の2) faa'ilaatun, ⑧mufaa'alatun である。〔表-2〕の、これ以外の丸番号のものの六種が派生歩脚型ということになる。原書には何故「基本」なのか、「派生」なのかの理由説明がなく、ただワティドに基づくものとして述べた後、すぐに各律格型のいずれに適用されているかを記しているだけである。基本歩脚型四種に共通するのは、ワティドが最初の音節に置かれていることである。④-1)でも分る如く、第二音節以降で構成されているものは、この範疇に入らないことが分明となる。また④-2)の型はワティドを無理に頭に持ってきた弁法であり、このようにしてまで作り上げたワティド構成をも「基本」歩脚型四種の内に含めているのは、矢張りワティド抜き、即ち「杭抜き」の弊害はできるだけ避けるべきであり、最終歩脚に欠節が生じても「杭」は安全に保たれ、それによって歩脚型、引いては律格型が明別できる装置とされているからと考えられよう。

従って歩脚型⑥――～ maf·'uu· laa· tu が詩行末に来て、そこが欠節となる場合、ワティド、即ち「テント杭」が末尾にある故に、杭抜き現象が生じることになる。本詩の場合、前半詩行末は――～、後半詩行末は――の欠節となっている。前者の欠節は、まず第四文字 (子音) が消去され、長音節から短音節化される。これを tayy 技法という。これで maf·'u· laa· tu ―――が得られる。続いて第七文字 (子音) を、それに伴っている母音ともども消去する。こ

れを kasf (足の腱を切断する, または kasf とも) 技法という。これで maf·'u·laa - - が得られることになる。

後半詩行末の - - は, 歩脚末の watid mafruuq (分断されたテント杭), 即ち C^v C C^v - - を haḏf (消去) する。これによって maf·'uu - - となる。maf·'uu は標準歩脚型でいうと fa'lun という。この fa'lun としてしまう技法は ^{かたわ}ṣalam (耳や鼻を切つて不具者にする) という。²⁰⁾ この ṣalam 技法の名称の意味からしても, この「杭抜き」が如何に詩法として負に働いているか推察できよう。

注

1. 本稿のアラビア語のローマ字表記は, 詩の律格への配慮から, いくつかの字母は通常見かけられる学術的表記とは異なっている。第一に一字母一音価にする必要から, /ṭh/ (歯間摩擦・無声音) は /e/, /kh/ (口蓋垂摩擦・無声音) は /x/, /dh/ (歯間摩擦・有声音) は /ð/, /sh/ (歯茎・硬口蓋摩擦・無声音) は /s/, /gh/ (口蓋垂摩擦・有声音) は /g/ とした。また, 三種ある長母音表記は /ā/ を /aa/, /ī/ を /ii/, /ū/ を /uu/ とした。
2. とは言え, この詩集に洩れたアブー・ヌワースの詩作品もないわけではない。al-Damīrii の Hayaatu l-Hayawaan の中に収められている Zurraq と題される tard (狩獵詩) がこの例である。この Zurraq (ハイタカ) の詩作品は拙稿「アラブ詩の律格型ラジャズについて」, 『詩的ディスクール』, 白鳳社, 1993, pp. 142~172 で論じているので参照されたい。
3. アラブ世界の古典の著書, 著者索引としてオーソドックスな Kaṣfu z-zunuun, Brockelmann, Kahḥaalāh, いずれにも見出しされていない。
4. 近代シリアの啓蒙思想家として名高い。名前から推してクルド人の血を引いている。1876年に生まれ, 1920~25年ダマスカス科学協会の会長を勤め, 文部大臣にもなる。エジプトにおいても活躍し, 王立科学協会の会員にも選ばれる。著書に『イスラーム哲学』, 『シリア地誌』, 『イブン・トゥールーン伝』などがある。1953年に死亡。
5. アラブ詩における拍 (長・短二種のみ), 及び拍の律格形式との関連については拙稿「アラブ詩の律格型ラジャズについて」(『詩的ディスクール』所収, 平成五年出版, 白鳳社) を参照されたい。
6. 『詩集』 p. 680, 註 1
7. 『鷹書』 p. 165, 註 2
8. silah 及び 'alif 付加技法に関しては 'Abdu s-Salaam Ṣaraaqii : al-Muḏakkiraatu l-waafiyah fii 'ilmayī l-'aruud wa-l-qaafiyah, 1368 A. H./1949 A. D. Alexandria, p. 74f 及び Kaamilu s-Sayyid Ṣaahiin : al-Labaabu fil-'uruud wa-l-qaafiyah, 1389 A. H./1969 A. D. Cairo, p. 124f を参照。
9. ウサーマ・イブン・ムンギズ : 『回想録』, 関西大学出版部 藤本勝次他訳, 1987, p. 263f.
10. 『鷹書』 p. 165。
11. アラブのタカ狩用「皮手袋」及びその最高品については拙稿「Bazī を謳う」 p. 59f を参照されたい。
12. 鉤爪を含めた趾全体を上から見た場合「クモデ」, その良相である趾・鉤爪の明らかに分枝しているものを「クモデワカレ」, 下から見た場合「クモデリ」, 趾の下にあるつかみ突起を「チイボ」。これらは宮内省式部職発行の『放鷹』(昭和五十八年七月, 吉川弘文館 再発行) 四一一~一二頁, 及び巻末の用語集に詳しい。
13. 『鷹書』 p. 165
14. 嘴の興味深い描写は, 他に拙稿「Bazī を謳う」 pp. 65~67 を見られたい。

15. 遠藤公男著『盛岡藩御狩り日記』講談社1994, 特に第二, 三章 pp. 30f。
16. al-Damiirii, Vol. 2, pp. 485~86 xawaass の項を参照。
17. 獲物が視界内で死んだか, 視界外でか, また何時死んだのかと言った点は, その獲物が halaal (可食) か haraam (不可食) となるか, 極めて大事な点である。「即死」もこれらの問題と関わって解釈される。詳しくは拙稿「狩猟の獲物とイスラムの食規定①, ②」VESTA NO. 19 (1994, 5月) pp. 24~32, NO. 20 (1994, 9月) pp. 58~66を参照されたい。
18. 歩脚型の変型でこれまで述べてきた haḍf とか xabn 他の技法であるが, 先の基本歩脚型⑤の変型1~3までにもさまざまな技法がある。本稿で述べなかったのは, 既に拙稿「アラブ詩の律格型ラジャズについて」第五・六節で展開させたからである。
19. 10種の歩脚型を基本型と派生型に分ける考え方は 'Abdu s-Salaam Šaraaqii : al-Muḍakkiraatu l-waafiyah, Alexandria (Egypt), 1949, pp. 10~11を参照されたい。表-2も同書 p. 10より。
20. Šaraaqii : Ibid. pp. 26~27
Kaamilu s-Sayyidu Šaahiin : al-Labaabu fi l-'aruudi wa-l-qaafiyah, Cairo, 1969, pp. 105~106。